

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

スペイン語における呼びかけ語の語彙と位置による
機能との関係について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 明衣, Nomura, Mei メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1533

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



スペイン語における呼びかけ語の語彙と位置による機能との関係について

野村 明衣

0. はじめに

本稿では、スペイン語の呼びかけ語 (vocativo) の語彙と、呼びかけ語が現れる位置による機能との関連性について考察する。呼びかけ語は、文頭では聞き手の注意を後続発話に喚起し、文末では話し手の伝達態度を表すなど、位置によって異なる機能を果たす¹。また呼びかけ語の語彙によって、話し手の様々な伝達態度を表明すると考えられる。では、呼びかけ語の語彙にはどのような種類があり、位置による機能とどのように関わるのであろうか。

1. 情²を表す呼びかけ語の語彙

1.1. ポライトネスとしての呼びかけ語

呼びかけ語は、Edeso Natalías (2005: 132) によれば、ポライトネスを表す手段として用いられる、と説明される。FFA³を表すために最も頻繁に用いられる呼びかけ語は、個人名、縮小辞や愛称の形式の個人名と、年齢や性別を表す名詞である、という。また Haverkate (1979: 86) は、依頼を和らげる呼びかけ語として、固有名詞と *hijo*、*mena*、*cielo* といった愛情を表す名詞句を挙げている。Nomura (2012) で考察したように、個人名でも発話状況などによって FFA を強めたり FTA⁴を和らげる機能を果たすが、この2つの先行研究から、固有名詞を除く呼びかけ語の語彙によってさらに呼びかけ語が発話にもたらす効果が増すことが予想される。

では呼びかけ語の語彙はどのような種類があるのだろうか。

1 Nomura (2012)

2 本稿では、個人名を除く名詞や形容詞の呼びかけ語を「情を表す呼びかけ語」と称す。これらの呼びかけ語は、喜怒哀楽などの感情だけでなく、愛情や敬意、皮肉など様々な心の状態を表すため、「情」という語を用いる。

3 Es, pues, indispensable prever un lugar en el modelo teórico para esos actos que, de algunas maneras, son la pendiente positiva de los FTAs, actos valorizadores de la imagen del otro, que proponemos llamar actos, “agradadores” de imagen (en adelante FFAs, por el inglés face flattering acts.) (Kerbrat-Orecchioni 2004: 43)

4 Some acts intrinsically threaten face; those ‘face threatening acts’ will referred to henceforth as FTAs. (Brown & Levinson 1978: 60)

1.2. 意味による分類

Beinhauer (1929; 1963) は、呼びかけ語の語彙は主に好感 (*simpatía*) と嫌悪 (*antipatía*)、皮肉 (*ironía*) の3つの種類に分かれる、と主張し、それぞれに具体例を挙げている。本節では、データから得られた例をもとに、特徴的な語彙のみを考察していく。なお、ここでは位置による分類は行わない。

1.2.1. 好感を表す呼びかけ語

Beinhauer (1929) は、好感を表す呼びかけ語としてまず *hijo/a* などの親族名称を例に挙げている。次の例を見てみよう。

- (1) Manolo: No te preocupes, hijo, cuando yo era como tú, la tenía mucho más chica.

(*Manolito Gafotas*: 104)

例(1)の話し手 Manolo は聞き手 Manolito の父親である。普通スペイン語では、親は自分の子を固有名詞で呼ぶことが多いため、この例は “No te preocupes, Manolito, (...)” となるのが一般的であろう。しかし、ここでは意図的に聞き手である息子を *hijo* と呼びかけている。この発話は命令であり、呼びかけ語を伴うことによって命令が和らぐ効果がある。また、発話内容を見ると、父親は息子に対して大人の視点から助言をしているため、*hijo* という語彙を用いて2人の親子関係を強調していると考えられる。

しかし Beinhauer (1929: 26) によると、呼びかけ語 *hijo/a* は普通(1)のように話し手が聞き手よりも年上である場合に用いられるが、時に話者間に年齢差がなく、さらに実際の親子関係がない場合にも用いられるという。Edeso Natalías (2005: 132) も同様に、*hijo/a* を用いることによって、話者間に擬似的な親子関係を作り出すことができると説明している。

次の(2)の例では、聞き手である Agustina は話し手 Sole の叔母の隣人であり、両者の間に親子関係はもちろんない。また年齢差もないが、呼びかけ語 *hija mía* が用いられている。

- (2) Sole: Está hecha una pena, hija mía.

(*Volver*: 33)

この場面では、話し手が叔母の様態を隣人に説明している。Edeso Natalías (2005) の主張からこの発話を見ると、本来親子関係を表す呼びかけ語を用い、

話し手と聞き手との間に擬似的な上下関係を作り出すことによって、自らの驚きを擬似的に少し上の立場から説明し、聞き手により良く理解してもらいたいという話し手の態度を表していると考えられるだろう。

次の例も同様である。

(3) Sole: Pensé que a ti eso no te ocurriría...

Raimunda: (Más afectada de lo que quisiera). Pues sí, hija, sí. No tengas complejo porque tu marido se fugara con una clienta...

(Volver: 82)

(3)では Raimunda の姉である Sole が、Raimunda の夫 Paco が家を出て行ったことについて、「あんたにはそのようなことは起こらないと思っていた」と告げる場面である。Raimunda は姉に対して自分にも起こるのだ、と主張する。Raimunda は Sole よりも年下だが、Sole を説得するため、擬似的に上の立場から hija と呼びかけているのだろう。

このように親族名称で呼びかけることにより、擬似的な関係を作り出し、聞き手よりも上の立場から情報を伝達しようとする話し手の態度を表すことができる。この擬似的関係によって、固有名詞を用いる呼びかけよりも、より効果的に情報を伝達できると考えられる。Alonso Cortés (1999: 4040) によると、同じく親族名称である tío は友人関係で用いた場合、話し手と聞き手が同じグループに属している仲間であることを表すという。今回のデータでは tío は9例観察され、日常会話において頻繁に用いられることが窺える。本来 tío は親族名称であるが、話し手にはそのような意識はなく、すでに一般的な用法になっており、hijo/a のように擬似的関係を強調しようとするような機能は果たさないだろう。また今回のデータには例がなかったが、年配の人に対する abuelo/a も hijo/a と同様に、話し手と聞き手との間に擬似的な親族関係を作り出し、話し手が聞き手に対して孫のように甘えようとする態度を表すと推測される。

また Beinhauer (1929: 34) は「どんな語でも縮小辞を伴えば、好感を表す」と説明し、さらに好感を表す呼びかけ語として、amor や carño といった名詞や、simpático や precioso などの形容詞を挙げ、「スペイン人の心の直接語りかける呼びかけ語⁵」と称している。次の例を見てみよう。

5 un soplo directo del alma popular española (Beinhauer 1929: 36)

- (4) Conductora: Lydia, tesoro, no seas ordinaria, déjame terminar la pregunta.
(*Hable con ella*: 30)
- (5) Benítez: (A Manolito.) Vamos... A bañarnos, prenda.
(*Manolito Gafotas*: 131)

tesoro は本来人ではなく、宝を意味する名詞だが、聞き手に愛情を表す呼びかけ語として一般的に用いられている。また prenda についても Beinhauer (1929: 37) は深い愛情を表す呼びかけ語であると述べている。また *mi vida* のように限定形容詞を伴う呼びかけ語もある。限定形容詞を用いることにより、愛情を表す度合いがさらに増すと考えられる。

次の(6)、(7)は今回収集したデータから得られた形容詞の呼びかけ語の例である。

- (6) Voz de oyente: ...Y que sepas que te oigo siempre que puedo. Y que eres muy fresca, muy... espontánea.
Rosa: (Sonríe.) Muchas gracias. ¿Entonces no quieres que te ponga nada?
Voz de oyente: No, bonita. Tú sigue así, tan alegre. Buenas noches.
(*Hable con ella*: 116)
- (7) [Ramón parece prestar atención, con la cabeza pegada a la tripa de Gené.]
Ramón: No siento nada. ¿Seguro que así hay un niño?
Gené: De siete meses, guapo.
(*Mar adentro*: 95)

bonita や guapo は愛情を表す形容詞である。(6)ではラジオの会話で、視聴者である話し手が聞き手 Rosa に bonita と呼びかけている。また、(7)の話し手 Gené は Ramón を擁護する人権団体の責任者で、胎動を聞こうとしている Ramón に対して guapo と呼びかけている。呼びかけ語としての guapo は、時に皮肉として用いられるが、この場面では話し手は聞き手と良い関係を築こうとしていると考えられるため、上にあげた2つの呼びかけ語 bonita と guapo は共に好感を表していると言える。

1.2.2. 嫌悪を表す呼びかけ語

嫌悪を表す呼びかけ語には、動物名称や増大辞を伴う語、imbécil などの侮辱表現や maricón のような卑猥表現が挙げられている。

次の例は話し手が聞き手に対する嫌悪を表す呼びかけ語である。

- (8) Catalina: Es que lo estaba viendo, ni descansar puedo cinco minutos. Pero, ¿se puede saber qué estás haciendo, bestia? Que no es nuestro el vídeo.
(*Manolito Gafotas*: 71)

(8)では、話し手である母親 Catalina が、聞き手である息子 Manolito の行動に腹を立てている。普段は個人名や *hijo mío*、*cariño mío* と呼びかけているが、この場面では怒りの表明として *bestia* と呼びかけている。このことから、呼びかけ語の語彙選択によって、話し手の伝達態度をより明確に表すことができることがわかる。

しかし、時に動物名称は嫌悪を表さないことがある。次の例を見てみよう。

- (9) Don Gregorio: Bien, Gorrión, bien...
(*La lengua de las mariposas*: 53)

この場面では教師 Don Gregorio が生徒 Moncho に対して *Gorrión* と呼びかけている。Moncho が母親と共に初めて学校に来た時、母親は「この子はすずめのように気が小さくて…」と教師に説明する。それを聞いた他の生徒達は、Moncho をからかって *Gorrión* と呼び始める。つまり *Gorrión* という呼びかけ語は、もともと悪意を含んで用いられていた呼びかけ語であった。しかし、教師は Moncho にそのあだ名を気に入ったと伝え、Moncho を *Gorrión* と呼んでいいか、と尋ねる。この教師は Moncho をよく気に掛けているため、彼に対して愛情を持っていることは明らかであり、Moncho に愛情を表す意味で *Gorrión* と呼び始めるのである。Beinhauer (1929: 38) は「侮辱的な語彙でも、縮小辞を伴えば愛情を表す表現にかわる」と述べている⁶。(9)の例では縮小辞は伴っていないが、話し手と聞き手の人間関係から、動物名称でも愛情を表す呼びかけ語として用いられていることがわかる。このように、動物名称は必ずしも嫌悪を表すわけではなく、話者同士の人間関係によっては好感を表す場合もあるのである。

次の例も見てみよう。*tonto* のような侮辱的な語彙は嫌悪を表すが、動物名称と同様に時に好感を表すことがある。

6 Miguel Mihura (1979) による戯曲 “*Tres sombreros de copa*” には、このタイプの呼びかけ語の例がある。主人公がフィアンセに対して “*Adiós, bichito mío.*” と呼びかける。名詞 *bicho* は嫌悪を表す語だが、縮小辞と限定形容詞を伴うことによって愛情を表している。

(10) Andrés: ¡Moncho!

[Moncho se levanta y se echa en sus brazos. Andrés lo besa, lo abraza con su propia ropa:]

Andrés: Pero, ¿a dónde ibas, tonto?

(*La lengua de las mariposas*: 17)

形容詞 *tonto* は本来侮辱的な言葉であるが、この例では聞き手に対する好感を表している。話し手 Andrés が聞き手である Moncho に対して愛情を持っていることは、Andrés の行為からも明らかである。Beinhauer (1929: 38-39) はこのような用法を、*insultos ficticios* と称し、嫌悪を表す語彙でも、親密な関係で用いられる場合には愛情を表す表現になる、と説明している。またスペインでは親しい女性に対して“*Adiós, fea.*”と挨拶をすることがあり、これも同様に聞き手である女性に対する親密さを表すと述べている。しかし、嫌悪を表す呼びかけ語の語彙を、聞き手が文字通りに受け取ってしまった場合、聞き手は話し手の意図を正しく理解できないばかりでなく、話し手と聞き手の人間関係に大きく影響を及ぼし得る。そのためこの用法が成り立つためには、話者同士が非常に親密であり、呼びかけ語の語彙が文字通りの意味を果たさないことを了解している場合のみであると考えられる。

1.2.3. 皮肉を表す呼びかけ語

Beinhauer (1929: 34) は、皮肉の呼びかけとして大人に対する呼びかけ語 *rico* を挙げている。一般的に *rico* は子供に対する愛情の表現であるが、時に嫌悪感を持つ人に対する皮肉として用いることがあるという。

rico の例は今回得られなかったが、次の例における *listo* は *rico* と同様に皮肉の意味で用いられている。

(11) Abuelo: Catalina, que tampoco es para tanto, que al angelico le han quedado las Matemáticas, ya las aprobará. Muchos grandes hombres suspendían las Matemáticas de pequeños: Fleming, Don Santiago Ramón y Cajal...

Catalina: Deja ya el rollo de los grandes hombres.

Abuelo: Hay formas y formas de regañar, hija mía.

Catalina: ¿Cuáles, listo?

(*Manolito Gafotas*: 48)

この場面では、算数の成績が悪かった Manolito を叱る Catalina を、祖父がなだめようとしている。祖父が算数が不得手であった偉人の名前を挙げると、Catalina は黙るように命令する。しかし、それでも話し続ける祖父に対して、Catalina は¿Cuáles, listo?と尋ねる。Catalina が祖父に腹を立てていることは発話状況から明らかであり、この例において呼びかけ語 listo は聞き手を褒めるのではなく、Catalina の怒りを表しているだろう。またこの呼びかけ語は、「あんたが子ども達を叱る方法を知っているのなら言ってみなさい」という言語外の情報を含み、皮肉としてこの語彙を選択していると考えられる。

また Beinhauer (1929: 33) によると、呼びかけ語はスペイン人特有のユーモアであり、皮肉の呼びかけは冗談を含み、即興で作られることがある⁷という。次の例では呼びかけ語が様々な言語で現れている。

(12) [Cuando vuelve a la terracita se queda de pie. Se inclina para besar a Alicia, atada al respaldo de la silla. Mientras la besuquea como a un bebé se despiden en varios idiomas, con expresión a cual más tierna.]

Katerina: Alicia, my sweet potato... Adiós... goodbye my sweetness, petootsens, chouquinolette, chouquinoletina, cheribibí... Cuídate.

(Hable con ella: 88)

(12)では話し手 Katerina が聞き手 Alicia を6つの様々な言語で呼びかけ Alicia に愛情を表している。この例を見ると、呼びかけ語の語彙選択は話し手の自由であり、使用数にも制限がないことがわかる。話し手 Katerina は映画の後半で Alicia を chouquina と再び外国語で呼びかけていることから、聞き手をこのように呼びかけるのが話し手の習慣なのであろう。

さらに、次の例はユーモアとして、聞き手を擬似的な職業名で呼びかけている。

(13) Alicia: (A Manolito.) ¿Te apetecen un par de huevos fritos, camionero copiloto?

Manolito: No puedo tomar huevos.

(Manolito Gafotas: 100)

7 Los vocativos irónicos desempeñan un papel considerable en el idioma, dado el carácter burlón peculiar de los españoles. Por lo común, son vocativos improvisados, interesantes sobre todo por el humorismo popular que dejan translucir. (Beinhauer1929; 1963: 33)

話し手 Alicia は聞き手である Manolito が10歳前後の子供であり、車の免許を持っていないことを了解している。しかし Manolito が、トラックの運転手である父親の助手席に乗って仕事に同行したことから、*camionero copiloto* という語彙を選択している。この語彙を Alicia が用いたのはこの場面のみで、その他の場面では Manolito と個人名で呼んでいるため、Alicia があたかも言葉遊びのように *camionero copiloto* と呼びかけていることがわかる。この場合は皮肉の意味は含まず、Alicia は Manolito に対して親愛の態度を表そうとしていると考えられる。

次の例も見てみよう。

(14) [Julia coge una mano de Ramón y la aprieta emocionada.]

Julia: Hola, marinero.

[Ramón le devuelve una sonrisa cariñosa.]

(*Mar adentro*: 98)

聞き手 Ramón は若い頃海で仕事をしていたが、海で怪我をして全身不随となる。そのような Ramón に対する *marinero* という呼びかけ語は、話し手と聞き手の関係によっては皮肉ともなり得る。しかし、実際には話し手 Julia と聞き手 Ramón は恋仲であり、Julia は全身不随となった今でも、Ramón が海が好きであることを知っている。そのため擬似的な職業名である *marinero* という呼びかけ語は、Ramón への愛情表現として用いられていることがわかる。このことから、呼びかけ語の選択は話者間の関係と、話し手のユーモアに深く関係していると考えられる。

このような職業名の擬似的用法について、Alonso Cortés (1999: 4041) は *jefe* の例を挙げ、実際に仕事関係がない人物にも頻繁に用いられると説明している。

(15) [El conductor sonríe a Ramón por el retrovisor.]

Conductor: ¿Y qué se le perdió a usted en Boiro, jefe?

Ramón: Me voy a la playa, a... cambiar de aires.

Conductor: A cambiar de aires... Eso está bien.

(*Mar adentro*: 159)

Ramón は運転手の上司ではないが、運転手は *jefe* と呼びかけている。Alonso Cortés (1999) は、客がタクシーの運転手に対して *jefe* と呼びかけることもあると述べているが、(15)では運転手が客である Ramón に *jefe* と呼びかけている。

親族名称でも考察したように、呼びかけ語は話し手と聞き手との間に擬似的な関係を作り出す機能を果たすことがある。jefe の場合もこれと同様に、呼びかけ語の使用によって、話し手は聞き手との間に社会的な階級を作り出そうとしているのである。(15)では、Ramón は運転手に賃金を支払う客であるため、運転手は Ramón との間に上下関係を作り出そうとして、jefe と呼びかけていると考えられる。一方、Alonso Cortés (1999) が挙げているような客が運転手に jefe と呼びかける場合には、運転手に目的地までの運転を任せようとする意識を強く持ち、「あなたは私を連れて行ってくれる人である」という意味を込めて、jefe という語彙を選択しているのではないだろうか。つまり jefe の使用は、どちらがより上位に立っているか、という話し手の意識に関わっていると言える。また次のような例も見られた。

(16) Gené: Por cierto, Julia, la abogada, quiere volver a verte, esta vez por más tiempo.

Ramón: ¿Y eso? A ver si es que se enamoró de mi.

Gené: (Riéndose.) ¡Más quisieras, guapo! Además, está casada...

(Mar adentro: 40)

(16)では Gené と Ramón が、Ramón の弁護士である Julia について話をしている。Ramón は Julia が自分に恋愛感情を持っていると発言するが、Gené は ¡Más quisieras, guapo! と答える。この呼びかけ語 guapo は Ramón に対する皮肉であるだけでなく、「うぬぼれないで、あんたは間違っているよ」という情報を含んでいるのではないだろうか。guapo は本来聞き手を褒める呼びかけ語であるが、この場合にはうぬぼれた聞き手に対する冗談であり、さらに語彙に言語外情報を含めていると考えられる。

このように、呼びかけ語の語彙選択には制限がなく、時に話し手のユーモアによって言葉遊びのような性質を持つため、様々な語彙が現れる可能性がある。話し手がどのような態度で、または聞き手とどのような関係を作り出して情報を伝えようとしているかによって語彙を選択していると考えられる。愛情を持って伝える時には好感を表す語彙を、怒りや不快を伝えたい時には嫌悪を表す語を用いて、固有名詞で呼びかけるよりも的確に伝達態度を表明することができるのである。そのため固有名詞を除く名詞や形容詞の呼びかけ語を、「情を表す呼びかけ語」と呼ぶことができるであろう。しかし情を表す呼びかけ語が常に文字通りの意味を表すわけではなく、発話状況に応じて異なる意味を表す。従って、呼びかけ語を用いる発話状況と、話者間の人間関係が最も重要で

あると言えるだろう。

1.2.4. *captatio benevolentiae*⁸の用法と語彙との関連性

Beinhauer (1929; 1963: 26) は、呼びかけ語が、話し手の要求を聞き手に実現させるために聞き手の行為を得ようとする *captatio benevolentiae* の機能を果たす、と説明している。これは Nomura (2012: 81) で述べたように、呼びかけ語の語彙によって、より効果的に聞き手に働きかけることが推測されるが、情を表す呼びかけ語は擬似的な関係を作り出す機能を持っており、*captatio benevolentiae* と同様に、聞き手に対して、話し手の要求を受けやすくするような親しい関係を作り出すために用いられることがある。では、情を表す呼びかけ語、特に好感を表す語彙と *captatio benevolentiae* とはどのように関わるのだろうか。

captatio benevolentiae を表す(4)の例を文脈と共に考察してみよう。

(4) Conductor(a): (Suavona y colegona.) Pero hablar es bueno, mujer. Hablar de los problemas es el primer paso para superarlos, porque el Niño...

Lydia: (Harta.) ¡Y dalé!

Conductor(a): Lydia, tesoro, no seas ordinaria, déjame terminar la pregunta. Porque el Niño de Valencia...

Lydia: ¡Le advertí en el camerino que no iba a hablar de este tema!

(*Hable con ella*: 30)

この場面では、インタビュアーが Lydia にかつての恋人について話をさせようとし、Lydia はそれを拒否する。インタビュアーはしつこく食い下がり、Lydia に対して *tesoro* と呼びかけ、機嫌をとろうとする。この例では、話し手は聞き手の好意を得るためにへつらい、自分の利益になるように相手に働きかけようとしているのである。このように呼びかけ語の語彙によって聞き手の機嫌をとろうとする機能は、好感を表す呼びかけ語特有の用法であると考えられる。好感を表す呼びかけ語の語彙について、Beinhauer (1929: 33) は、そのほとんどが *captatio benevolentiae* の一種であると述べている。しかし次の例を見ると、必ずしもそうでないことがわかる。

8 Hay otros cumplidos de índole más egoísta e interesada. Me refiero a los casos llamados de “*captatio benevolentiae*”, o sea a adulaciones con las que se pretende influir en el interlocutor. (Beinhauer 1929; 1963: 127)

(17) Rosa: ¿Insinúas que Benigno es maricón?

Enfermera jefe: No lo insinúo yo, es vox populi, bonita.

(*Hable con ella*: 116)

この場面において婦長は Rosa を説得しようとしているが、先ほど見た例のようにへつらいの態度も下心も感じられない。この例では bonita という呼びかけ語は単に婦長から Rosa に対する親愛を表しているなのであろう。

次の例も同様に、好感を表す呼びかけ語は *captatio benevolentiae* の機能を果たしていない。

(18) [Suenan el móvil de Gené.]

Gené: ¿Diga...? ¡Ramón! ¿Qué tal...? Espera, espera, que aquí no me entero de nada.

[Gené se dirige hacia la salida. Gené sale a la calle y se coloca junto a la fachada del restaurante.]

Gené: Cuéntame, guapo.

(*Mar adentro*: 155)

この例においても、*guapo* は話し手の要求を含んでおらず、単に聞き手への愛情を表し、先行する命令を和らげていると考えられる。このように好感を表す呼びかけ語であっても、常に *captatio benevolentiae* の機能を果たすわけではない。情を表す呼びかけ語の基本的な機能は、聞き手に対する話し手の伝達態度の表明であり、FFA を和らげたり FTA を強め、話し手と聞き手との間に、語彙が表す擬似的な関係を作り出すことなのである。しかし(4)のように、話し手の意図が明らかである場合には *captatio benevolentiae* としての機能を果たすのであろう。

また、好感を表す語彙を用いて呼びかけても、必ずしも話し手の望みが実現されるとは限らない。(4)では、話し手が聞き手と親密な関係を作り出そうとしているにも関わらず、話し手の要求は実現しない。それどころか、聞き手は *tesoro* という呼びかけに気分を害したのである。これは語彙によるのではなく、聞き手の気分や、話し手と聞き手の人間関係に原因があるだろう。(4)はテレビのインタビュー番組であり、話し手と聞き手は初対面であったにもかかわらず、好感を表す呼びかけ語を用い、さらに個人的な質問に対する返答を要求したので、聞き手は不愉快に感じたのであろう。

Hasbún Hasbún (2003: 203) はコスタリカの市場における、売り手から客に対

する親愛を表す呼びかけ語 *mi vida* の使用について、商品を購入させるために聞き手にへつらい、聞き手のポジティブフェイスに働きかけようとする効果があると述べている。しかしそのような呼びかけ語によって聞き手は気分が良くなる場合もあれば、逆に馴れ馴れしいと感じ、気分を害する場合もあるという。つまり話し手が聞き手の好意を得ようと、呼びかけ語の語彙によって擬似的に親愛関係を築こうとしても、実際に聞き手の好意を得られるかどうかは発話状況や聞き手の受け取り方、また話し手同士の間人間関係によると言える。

1.3. 情を表す呼びかけ語の再分類

これまで見てきたように、呼びかけ語は時に語彙そのものの意味を表さないことがある。呼びかけ語がどのような意味を表すのかは、発話状況や話者間の人間関係によって異なるため、呼びかけ語の語彙を好感、嫌悪、皮肉といった意味による分類を厳密に行うことはできない。

ではこれらの情を表す呼びかけ語の語彙はどのように分類することができるだろうか。これらの語彙はまず統語的に名詞、形容詞といった品詞別に分類することができる。さらにそれぞれの語彙を観察したところ、名詞は人を表すものと、本来、人以外の事柄を表すものに、形容詞は見た目を表すものと、性格や性質など目には見えないものを表す語彙とに下位分類することができる。

情を表す呼びかけ語の語彙を改めて分類した結果は次の通りである。

表 1 情を表す呼びかけ語の分類

	人を表す名詞	人以外を表す名詞
名詞	性別 <i>mujer, hombre, macho</i> 年齢 <i>chico/a, niño/a, nene/a, chaval, chiquitín</i> 職業 <i>doctor, maestro</i> 敬称 <i>señor/a, señoría</i> 親族名称 <i>hijo/a, tío, hermano</i> 話者との関係 <i>amigo, compañero</i> 等	動物 <i>bestia, foca, garrapata, gorrión</i> 物 <i>tesoro, prenda,</i> 抽象名詞 <i>cariño (mío), (mi) amor, (mi) vida</i>
形容詞	外見を表す形容詞 <i>vieja, bonita, guapo</i>	性格・性質を表す形容詞 <i>listo, pobre, tonto/a, ruso</i>

人を表す名詞では、聞き手の性別、年齢、職業、また話し手との社会的関係を表すような語彙が分類される。本来、人以外の事柄を表す名詞としては、動物名称や抽象名詞が挙げられる。形容詞の語彙は全741例わずか7例のみであった。

次に情を表す呼びかけの頻度語をまとめた。なお一度しか現れなかった語彙には省略する。

表 2 情を表す呼びかけの頻出語

hijo/a (mío/a)	37	chaval	4
hombre	18	nene/a	4
mujer	17	señoría	4
señor/a	9	guapo	4
tío	9	chico/a	3
cariño (mío)	7	gorrión	3
amor (mío)	5	tonto/a	3
niño/a	5	bonita	2

最も頻繁に現れたのは親子間及び擬似的に用いられる **hijo/a** であり、次に **hombre** が続く。また **mujer** も多く現れている。使用頻度が多いのは人を表す名詞であるが、**guapo** や **tonto/a** などの形容詞は頻繁に用いられている。表 2 に示した語彙は日常会話において一般的に用いられる呼びかけ語であると考えられる。

ではこの分類と用いられる頻度にはどのような関係があるのだろうか。これは次節で考察する呼びかけ語の位置と深く結びついているのである。

2. 情を表す呼びかけ語の位置と機能

2.1. 情を表す呼びかけ語の分布

まず情を表す呼びかけ語の例数を見てみよう。情を表す呼びかけ語には、1) 個人名を除く名詞及び形容詞、2) 親族関係において目下から目上（おいからおじ、孫から祖父母または子どもから親など）に対する呼びかけを除く親族名称、3) 親から子どもに対する **hijo/a (mío/a)** を分類した。親族関係では目下から目上に呼びかける場合、普通個人名ではなく親族名で呼びかけるため対象から除いた⁹。反対に親から子どもに対しては、一般的に個人名で呼びかけるが、**hijo/a (mío/a)** と呼びかける場合には、親は子どもに対して愛情を示そうとしていると考えられるため、情を表す呼びかけ語の対象に含んだ。

9 親族関係において、現在では、目下から目上の聞き手に対して個人名で呼びかける場合もあるが、今回使用したデータでは、すべて親族名称が用いられていたため、この基準を採用する。

次に情を表す呼びかけ語を、発話中に現れる位置ごとに分類する。位置による分類は、シナリオの文字表記¹⁰を基準とした。文が呼びかけ語で始まり、後にコンマが付いている用例を「文頭」、呼びかけ語が文中にあり、前後にコンマが付いている用例を「文中」、呼びかけ語の前にコンマがあり、かつ後ろにピリオドなどの終止記号がついている用例を「文末」の用例とみなした。また呼びかけ語が単独で用いられ、ピリオドか感嘆符または疑問符がついている用例もあったが、本稿では対象からはずす。

情を表す呼びかけ語の位置ごとの例数は以下の通りである。なお表3に示した割合は、それぞれの位置の例数に対して情を表す呼びかけ語が占める割合である。

表3 情を表す呼びかけ語の分布

位置	呼びかけ語全例数	情を表す呼びかけ語の例数	割合
文頭	158	17	10.6%
文中	162	49	30.2%
文末	421	128	30.4%
合計	741	194	26.1%

情を表す呼びかけ語は全体の26.1%を占める。残りの約74%は個人名の用例ということになる。それぞれの位置の例数を見ると、個人名を含む呼びかけ語では文頭と文中の例数にあまり差がないのに対して、情を表す呼びかけ語では明らかな差が見られる。情を表す文中の呼びかけの割合は文末とほぼ同等である。この結果から、情を表す呼びかけ語は、固有名詞を含む呼びかけ語全体と比べると文頭では現れにくく、主に文中や文末で現れることが分かる。この原因をそれぞれの位置における機能との関連から分析していく。

2.2 情を表す呼びかけ語を含む文の機能の分類

まず、情を表す呼びかけ語がどのような機能の文に伴って現れるかを見ていく。文の機能は意味ごとに11種類に分類した。

10 RAE (1973: 146) の分類による。

表4 情を表す呼びかけ語を含む文の機能の分類

文の機能	位置			
	文頭	文中	文末	合計
主張	8	14	33	55
命令（勧誘）	4	13	31	48
質問	1	1	24	26
感嘆	1	0	4	5
挨拶	0	8	10	18
返答	0	7	14	21
感謝	0	0	1	1
謝罪	0	0	0	0
賞賛	0	1	0	1
説明	3	5	11	19
確認	0	0	0	0
合計	17	49	128	194

主張および命令では、情を表す呼びかけ語が頻繁に用いられている。Nomura (2012: 67) で述べたように、呼びかけ語を用いることによってFTAの威力を和らげたり、FFAをより強めたりするポライトネスの機能を果たす¹¹。Edeso Natalías (2005) と Haverkate (1979) が主張するように、情を表す呼びかけ語の語彙によってさらにポライトネスの態度を強調する効果があると考えられるため、主張および命令で情を表す語彙が頻繁に用いられるのは自然であろう。しかし、挨拶や返答においても個人名の呼びかけと比べて使用頻度が高い。これは情を表す呼びかけ語の特徴と関係があるのだろうか。なお、Edeso Natalías (2005) は、「FFAの行為である感謝や賞賛では、年齢や性別を表す呼びかけ語が頻繁に用いられる」と説明しているが、今回はあまり例が見られなかった。

ではそれぞれの位置における情を表す呼びかけ語の機能を見ていこう。

11 Beinbauer (1929; 1963: 109-110) は、「会話は話し手が聞き手を説得しようとする戦い」であるとし、その際に最も威力を発揮するのはポライトネスである、と述べている。

2.3. 文頭の呼びかけ

Nomura (2012) でも考察したとおり、文頭の呼びかけは聞き手の注意を喚起する機能を持つ。

(19) Sole: (*Murmura, a Raimunda*). Niña, nos tenemos que ir.

(*Volver*: 38)

この場面では話し手 Sole は聞き手 Raimunda のすぐ横に座っており、違う方向を向いている Raimunda の注意を喚起するため、耳元でささやくように呼びかける。niña という呼びかけ語は普通子供に対して用いられるが、Sole は成人である妹に愛情表現として niña と呼びかけているのだろう。この呼びかけ語は話し手の愛情を含んではいるが、機能としては聞き手の注意喚起である。

次の例でも文頭の呼びかけは注意喚起の機能を果たしている。

(20) Luisa: Hola, Cata. Hija, me da no sé qué molestarte tanto, sobre todo cuando tú te quedas aquí sin ir a ningún sitio, pero, ya que me riegas las plantas, ¿no te importaría subirme y bajarme las persianas un par de veces al día?

(*Manolito Gafotas*: 66)

(20)では隣人 Luisa が聞き手に対して依頼をするため、文頭で hija と呼びかけてニュアンスを和らげようとしている。また、Nomura (2012: 75) で考察したように、聞き手にとって重要な話を切り出す前に注意喚起することによって、重要な発話の前置きとしての機能を果たしているとも考えられる。この機能は文頭の呼びかけの基本的な機能から派生したものであるため、機能としてはやはり注意喚起である。従って、呼びかけ語が情を表す語彙であっても、位置による基本的な機能は変わらないのであると言える。

では、なぜ文頭では他の位置と比べて、情を表す呼びかけ語が現れにくいのだろうか。Haverkate (1979: 86) は、呼びかけ語は文末に現れる傾向があり、これは文頭が典型的な注意喚起の位置だからである、と述べている。表 3 で示した情を表す呼びかけ語の分布の結果から、この説明は特に情を表す呼びかけ語に当てはまると考えられる。(19)と(20)の例では、話者間の距離と発話状況を考えると、聞き手はほぼ特定されているため、発話の冒頭に情を現す呼びかけ語を用いることができたのであろう。しかし、聞き手になり得る人物が複数いて、話し手がそのうちの 1 人に呼びかけたい場合に情を表す語彙を用いると、聞き手をはっきりと特定できない可能性がある。例えば、道路の反対側を歩い

ている友人に対して **chico** と呼びかけた場合、その周りにいる若い男性や子ども全員が振り返る可能性があり、聞き手の特定は困難であろう。

また、今回のデータでは情を表す文頭の呼びかけ語のほとんどが **hija** や **señor**、**chico** といった人を表す語彙であったが、これらの語彙でさえ場合によっては聞き手をはっきりと明示することができないのであれば、人以外を表す **tesoro** のような聞き手に対する何らかの評価を含む語は、注意喚起としての機能をより果たしにくいのではないだろうか。ましてや見た目を表す **guapa** や **bonita**、**listo** のように性格や特徴を表す形容詞では、なおさら聞き手を特定しにくいだろう。**guapa** や **bonita** といった見た目を表す形容詞は、時に誘い文句 **piropo** として用いられることがあるというが、聞き手の性格や性質を知っていると選択しにくい **listo** や **ruso** といった形容詞は、見知らぬ人を呼びかける際にはあまり用いられないと考えられる。実際にそういった語は文中や文末に現れている。

また、文頭で **hombre** と呼びかけている例が数例見られた。

(21) Alicia: (...) y tú, ¿qué haces cuando sales?

Benigno: Nada. Yo no salgo.

Alicia: Hombre, algo saldrás.

(*Hable con ella*: 98)

このような **hombre** について **Beinhauer (1929: 30)** は、「全ての生物に対して用いることのできる呼びかけ語で、自分に対して用いられた時には間投詞としての機能を果たす」と説明している。日常会話では頻繁に間投詞として用いられるため、(21)の例が呼びかけなのか、あるいは間投詞的なのかを特定することは困難である。たとえ呼びかけ語だとしても発話状況から考えると、注意喚起の機能を持っているとは考えにくいだろう。

このように、文頭の呼びかけは他の位置と比べて機能が限定的であるため、呼びかけ語の語彙も明確に聞き手を特定できる語に限られるのであろう。むしろ情を表す呼びかけ語は、**Nomura (2012: 80)** において、話し手の伝達態度がはっきり現れると結論付けた文末にこそ積極的に現れているのではないだろうか。

では文末に現れる語彙について見ていこう。

2.4. 文末の呼びかけ

2.4.1. 文末に現れる情を表す呼びかけ語の語彙

文末に現れる呼びかけ語の傾向を分析するため、以下にそれぞれの位置に現れる呼びかけ語の語彙の分類を示す。

表5 それぞれの位置に現れる呼びかけ語の語彙

文の機能	位置		
	文頭	文中	文末
主張	hijo/hija (mío/mía), hombre, señoría, niña, chico	hijo/hija (mío/mía), hombre, señoría, chica, tío, hijoputa, amigo (mío)	hijo/hija (mío/mía), mujer, tío, señora, señoría, chico/a, (mi) vida, amor (mío), guapo, bonita, tonto
命令 (勧誘)	hijo/hija (mío/mía), hombre, señor, chico	hijo/hija (mío/mía), hombre, mujer, hermano, niño, señor/a, nena, tío, cariño, tesoro	hijo/hija (mío/mía), hombre, mujer, cariño, chaval, nena, señor, señoría, macho, niña, (mi) amor, prenda, foca, garrapata, guapo, ruso
質問		mujer	hijo/hija (mío/mía), hombre, mujer, doctor, niño, chaval, chiquitín, jefe, bestia, gorrión, cariño, camionero copiloto, listo, tonto
感嘆	hijo/hija (mío/mía)		hijo/hija (mío/mía), tío
挨拶		nene, my sweetness, petootsens, chouquinalatte, chouquinoletina	hijo/hija (mío/mía), señora, amiga, compañero, gorrión, marinero, my sweet poteto, cheribibi
返答		hijo/hija (mío/mía), hombre, mujer, chiquitín	hijo/hija (mío/mía), señor, señoría, hombre, mujer, (mi) amor, vieja, bonita, pobre, tonta
感謝			chaval
謝罪			
賞賛		gorrión	
説明	hombre, cariño	hijo/hija (mío/mía), señoría, tío, delincuente, amigo (mío)	hijo/hija (mío/mía), señor, señoría, cariño, guapo
確認			

この結果から、文末では他の位置と比べて様々な語彙が現れていることが明らかである。これは、Nomura (2012) で考察してきたように、文末の呼びかけは情報を伝える際の話し手の態度が他の位置と比べて顕著に現れるため、情を表す呼びかけ語の語彙によってさらに効果的に伝達態度を表明できるためであると考えられる。例えば、*señor* という呼びかけ語は聞き手に対する敬意を表すが、主に文末に現れる。

(22) Don Gregorio: Llámelo por favor.

Rosa: Sí, señor.

(*La lengua de las mariposas*: 18)

Beinhauer (1929: 164) によると、返答に続く *señor* という呼びかけ語はすでに固定化された表現であり、“*Sí, señor.*” や “*No, señor.*” のように、返答に続けて発話されるという。他にも *señoría*、*doctor* や *profesor* といった敬称も敬意を表すために用いられる。このような話し手の伝達態度を表す語彙は、文末で最も効果が現れると考えられる。文頭で *señor* と呼びかけた場合、聞き手に対する敬意は伝わるかもしれないが、その位置ではやはり聞き手の注意喚起の機能が強く、聞き手も後続発話に注意を傾けるため、話し手の敬意の表明は文末に比べて弱まるだろう。一方、情報を伝えた後の文末では、呼びかけ語の語彙は文頭と比べてより際立つ。実際に *camionero copiloto* や *jefe* のように特別な意味をもつ即興で作られる呼びかけは文末に現れている。また前節で考察した(16)のような言語外の情報を含む場合、文末だけこの機能を果たすことができると考えられる。

2.4.2. 文末の呼びかけの特徴

さらに表5の結果から、文末の呼びかけのもう一つの特徴が窺える。即興でつくられるような話し手のユーモアに関わる呼びかけ語は、比較的情報量が多い主張や説明ではあまり用いられず、質問や挨拶、返答といった短い発話に現れている。

具体的に例を見ていこう。

2.4.2.1. 情報伝達が優先される場合

次の例は主張を表す例である。

(23) Regina: ¡Yo puedo dar copas por la noche, niña!

(Volver: 87)

(24) Abuela: (Ruega que la crea.) Yo no sabía nada, hija mía. Ni me lo podía imaginar.

(Volver: 159)

(23)では話し手 Regina が、聞き手が経営する食堂でドリンクを担当したいと主張し、聞き手に *niña* と呼びかけている。また(24)では、ベッドの下に隠れていた Abuela を見つけた Raimunda に対して *hija mía* と呼びかけ、「私は何も知らなかった」と主張している。この2つの例では聞き手に愛情を含むと考えられる語彙が用いられているが、話し手の伝達態度を表す文末の語彙だけでなく、主張内容そのものの伝達も重要であろう。このような場合にユーモアに関わるような、または言葉遊びのような性質を持つ語彙で呼びかけると、話し手の主張を正確に伝える妨げとなるのではないだろうか。そういった語彙は、*carinho* や *hijo* など比較的頻繁に用いられる語彙と比べると、発話状況や人間関係に応じて特別な意味を含むため、挨拶や返答と比べて情報量の多い主張に用いると、主張内容と呼びかけ語の語彙がそれぞれに情報を強く持ち、結果的に情報伝達そのものに支障がでる可能性があるのではないだろうか。特に(24)のように、話し手が聞き手にすがろうとする場面で、特徴的な語彙で呼びかけると、話し手が不真面目に発話をしていると聞き手が受け取り、聞き手の怒りをひき起こす可能性がある。従って、伝達態度の表明だけでなく、情報伝達も重要である場合には、より一般的な語彙が用いられると考えられる。

同様に説明の例においても特徴的な語彙は現れていない。

(25) Rosa: (Con gracia.) ¡Los reyes no se presentan a las elecciones, mujer!

(La lengua de las mariposas: 28)

(11) Abuelo: Hay formas y formas de regañar, hija mía.

(Manolito Gafotas: 48)

上記の例で、話し手は聞き手が発話した内容に関わる説明をしている。このような場合、伝達態度ももちろん重要であるが、主張の場合と同様に情報そのものを伝達する方がより優先されるのだろう。従って、話し手は無意識のうち一般的な呼びかけ語の語彙を選択しているのではないだろうか。(11)のような聞き手をなだめようとする場面で、ユーモアで作られるような語彙を用いると、主張の例と同様に、聞き手の怒りをひき起こす可能性があり、発話内容の

伝達の妨げとなる可能性があるだろう。

しかし次の例では比較的短い説明に *tonto* が呼びかけ語に用いられている。

(26) Manolito(OFF): Mi hermano es un niño bastante cinéfilo.

[El Imbécil la suelta y vuelve a coger una de las de dibujos.]

El Imbécil: Ésta.

[Manolito intenta convencerlo con una que le apetece a él, alguna de Indiana Jones, por ejemplo.]

Manolito: Ésta es muy bonita, tonto...

El Imbécil: (Aferrándose a los dibujos.) No, ésta.

(*Manolito Gafotas*: 70)

呼びかけ語 *tonto* は、発話場面に応じて好感や嫌悪、皮肉など様々な態度を表す。この場面における Manolito の発話は、文の機能の分類ではある映画についての説明となる。Manolito は的外れな映画ばかりを選ぶ弟を説得しようと *tonto* と呼びかけてある映画を勧める。つまり、呼びかけ語 *tonto* はこの場面では特殊な意味を持たず、文字通りの意味を表すだろう。しかし(25)や(11)で *tonto* と呼びかけると、情報を伝達するにはあまりにも呼びかけ語の意味が強くなってしまう。これらの例における差は、発話状況が真剣な場面であるか、あるいは砕けた場面であるかということであろう。呼びかけ語の語彙選択は発話状況によるため、主張や説明では必ずしも特徴的な語彙は現れない、と断定することはできない。しかし話し手の真剣な態度を表し、発話内容の情報伝達を妨げないために、より一般的な語彙を選ぶ傾向があるとは言えるのではないだろうか。またそのような場合、伝達する情報量によって発話は長くなる傾向がある。

2.4.2.2. 人間関係が重視される場合

一方、挨拶や返答のように、聞き手との人間関係がより重視される発話では、比較的自由な語彙が現れている。

(12) Katerina: Alicia, my sweet potato... Adiós... goodbye my sweetness, petootsens, chouquinolette, chouquinoletina, cheribibí... Cuídate.

(*Hable con ella*: 88)

(14) Julia: Hola, marinero.

(*Mar adentro*: 98)

(12)では様々な言語で呼びかけ語が用いられている。そのうちのいくつかは分類上文中であるが、全て挨拶に続いている。Goffman (1967; 1982: 41)によると、挨拶は人間関係を強め補う行為であるという。呼びかけ語の語彙選択によって、話し手がどのような態度で、また聞き手とどのような関係を築こうとしてそのときの会話を始め、また終わろうとしているかを表すことができると考えられる。(22)では話し手にとっての親愛の語彙で愛情を表し、(14)では話し手 Julia は聞き手に対して冗談を言い合う関係であるという親しみを表して挨拶をしているのであろう。今回の資料には例がなかったが、Beinhauer (1929: 39) が指摘した、話し手が聞き手に対して *fea* という呼びかけ語を用いて挨拶をするような例では、*fea* という語を親愛表現として用いる関係である、という共通意識を持って聞き手と話そうとしていると考えられる。

同様に返答においても人間関係が重要である。

(22) Don Gregorio: Llámelo por favor.

Rosa: Sí, señor.

(*La lengua de las mariposas*: 18)

(27) Regina: Con tu escote y mis mojitos nos podemos hacer de oro, Mundita. ¡
Vale, vieja!

(*Volver*: 108)

今回は *sí* や *no* だけでなく *vale* や *bueno* といった承諾も、返答の機能に分類した。こういった短い返答は主張や説明と比べると情報量は少ないが、聞き手の質問や依頼に答える行為であるため、話し手は返答をする際にお互いの人間関係を表そうとするのではないだろうか。そうでなければ、聞き手は話し手が喜んで応えようとしているのか、そうではないのかを判断することができないためである。(22)では、Don Gregorio が Rosa よりも社会的に上の立場であるため、聞き手の命令に対して敬意を払って応えようとする表明であらう。敬称を伴う返答が固定化された表現となっているのは、こういった社会的関係の表明が頻繁に行われるためであると考えられる。(27)では話し手 Regina と聞き手 Raimunda は友人関係であり、親しみを表すために *vieja* と呼びかけている。短い情報を伝える際には情報の伝え方が非常に重要であり、呼びかけ語はそういった伝え方を表現する働きを持つため、話し手同士の人間関係に応じて、比較的自由的な語彙が選択されるのであろう。

2.4.2.3. 伝達態度がより強調される場合

また命令や質問でも特徴的な語彙が現れている。

(28) Susana: Calla, foca.

(*Manolito Gafotas*: 43)

(29) Santa: No me toques los huevos, ruso.

(*Los lunes al sol*: 123)

命令は比較的情報量が少ないため、呼びかけ語の語彙によってどのように情報を伝えるかという話し手の伝達態度を付加していると考えられる。(28)では、話し手 Susana が教師に告げ口をした祖母に対して foca と呼びかけ、嫌悪感を露わにしている。ここで話し手が個人名で呼ぶか、または呼びかけ語を用いない場合、命令は foca を伴って命令するよりも、発話の厳しさが少し和らぐことが予測される。foca を伴うことによって、「私は聞き手を foca と呼ぶことができる立場から命令する」という、非常に厳しい嫌悪感を含むと考えられる。同様に(29)では、話し手 Santa は普段は個人名で呼んでいるロシア人の友人が、自分の揚げ足を取った際に、「話をさえぎるな」という意味を含めて、この場合にのみ、自分と相手を明確に区別するような ruso という語彙を用いている。つまり、呼びかけ語の語彙選択によって、情報をどのような立場で伝達しようとしているかを表すのである。

このように命令の文でも、挨拶や返答と同様に言葉遊びの性質を持つような語彙の呼びかけ語を用いられているが、命令の場合は選択理由が少し異なるだろう。挨拶や返答そのものが人間関係に大きく関わる行為であるため、語彙によって話し手と聞き手の関係を明示することがより重要であるのに対し、命令の場合は、命令をどのように伝達するのかに重点が置かれる。命令を和らげたならば好感を表す語彙を用い、精神的に聞き手を遠ざけ、より厳しい態度で伝達したい時には嫌悪を表す語彙を用いるのである。

質問においても同様の理由により、特徴的な語彙が現れている。

(30) Manolo: ¿Qué os da tu madre que cada día estáis más gordos, garrapatas?

(*Manolito Gafotas*: 55)

この例では話し手 Manolo が息子達を garrapatas と呼んでいるが、話し手と聞き手は親子であり、発話状況を考えても、ここでは親愛表現であると考えられる。

また次の例も見てみよう。

- (13) Alicia: (A Manolito.) ¿Te apetecen un par de huevos fritos, camionero
copiloto?

(Manolito Gafotas: 100)

- (15) Conductor: ¿Y qué se le perdió a usted en Boiro, jefe?

(Mar adentro: 159)

聞き手に質問をするときには情報の伝達態度と話し手同士の人間関係の両方の要素が重要であると考えられる。質問は聞き手に何らかの返答を要求し、返答内容は聞き手に委ねるものである。話し手が聞き手への信頼を示し、円滑なコミュニケーションを実現するために、質問をする話し手と、返答をする聞き手の人間関係は非常に重要であると言える。しかし同時に情報の伝達態度も重要となる。例えば、(30)では話し手が息子達に愛情をもって質問をしているのに対して、(11)の¿Cuáles, listo?という発話では listo という語彙が話し手の怒りを表していることがわかる。従って、伝達態度と人間関係の両方の要素が質問をする際に自由な語彙を選択させるのではないだろうか。

これらの傾向には、例外も多く存在するだろうが、発話の情報量と語彙選択との関連性が窺える。今後さらに分析を続けていく必要があるだろう。

では情を表す語が文中で現れる割合が増えたのにはどのような要因が関わっているのだろうか。

2.5. 文中の呼びかけ

Nomura (2012: 84) で考察したように、文中の呼びかけは、条件節と帰結節の間、あるいは主節と従属節の間で現れる場合は、後続発話に対する聞き手の注意喚起の機能を果たし、等位接続や並列的接続の間で現れる場合には、先行発話の文末的要素を持つ。話し手の情を表す語彙を用いることによって、文頭および文末と同様に個人名では表すことのできない情報を付加することができるだろう。

次の例は、Raimunda が死体を隠した冷蔵庫を土に埋めるのを手伝ってほしいと友人 Regina に申し出て、Regina はそれを受ける代わりに客が支払うドリンクの代金の全てを渡すよう条件を出した後の発話である。

(31) Raimunda: De acuerdo, socia, pero de esto ni una palabra.

Regina: ¡Qué remedio! ¡Ahora soy tu cómplice!

(*Volver*: 136)

Raimunda は Regina の条件を受け入れ、socia と呼びかけ、他言しないようにと告げる。呼びかけ語の後ろの発話は接続詞 pero を伴っているため、この呼びかけ語は先行発話の文末的要素である。ここで socia という語彙を選択することによって、Regina が Raimunda を手伝うことを確認させ、他言させないために共犯者という関係を作り出そうとしていると考えられる。この場合に個人名で呼びかけると、Raimunda のそのような意図を表明できないだろう。

このように、呼びかけ語の語彙が発話に与える影響は強いが、情を表す文中の呼びかけの基本的な機能は、Nomura (2012) で述べた、個人名を用いた例の機能と同様である。また、情を表す語彙は聞き手を特定できない可能性があるため、文の始めにはあまり用いられないと考察してきたが、たとえ mira や oye のような短い発話であっても、何らかの情報の後では聞き手がすでに特定されており、また先行発話の文末要素の場合は、文末としての機能を果たすため、状況に応じて様々な語彙を選択することができるのであろう。このような理由から情を現す文中の呼びかけの割合が増えていると考えられる。

2.5.1. 個人名の後に現れる情を表す呼びかけ語

情を表す文中の呼びかけは、個人名では果たすことのできない機能を持っている。個人名の後に情を表す語彙が現れる例がいくつか観察された。

(4) Conductor: Lydia, tesoro, no seas ordinaria, déjame terminar la pregunta.

(*Hable con ella*: 30)

(32) Ramón: José, hermano, escúchame un momento por favor.

(*Mar adentro*: 88)

(33) Gené: ¡Marc, cariño, haz el favor de mirar al frente!

(*Mar adentro*: 113)

(34) Julia: Y antes, si tú quieres, Ramón, mi amor, me gustaría ayudarte...

(*Mar adentro*: 111)

上記の(4)、(32)、(33)の3例では個人名が文の冒頭に現れていて、情を表す呼びかけ語は個人名と共に聞き手の注意を喚起する機能を持つ。また最後の例では、条件節と帰結節の間に現れる本来の文中であるため、後続発話への注意喚

起の機能を果たす。これらの例では聞き手はすでに明らかであるため、情を表す語を用いて改めて呼ぶ必要はない。しかし話し手は聞き手との社会的関係を明確に表明するために、意図的にもう一度呼んでいる。そうすることで発話内容に、伝達態度を付与しているのである。これは個人名では表すことのできない機能である。また(4)、(32)、(33)の3例は命令であり、最後の例は分類上は主張だが、全身不随の聞き手の自殺を手助けしよう、というのが非常に重要な内容の提案である。このような場合に、情を表す語彙を用いることによって、話し手は発話の強さを和らげようとしているのではないだろうか。しかし、位置による基本的な機能には影響せず、上記の全ての例がこれまで考察してきた文中の呼びかけとしての機能を果たしている。

今回はこの4例以外には観察されなかったが、この用法は情を表す文中の呼びかけ特有のものであると言えるだろう。

このように情を表す語は特別な意味を情報に付加する機能を持つが、それぞれの位置による機能には影響しない。例えば *captatio benevolentiae* を好感を表す語彙を用いて文中あるいは文末で表したい場合、どちらの位置でもその態度を示すことができが、位置による機能の上に態度が付加されるのである。文末ではより聞き手に働きかける態度が際立ち、文中では先行発話の文末的要素、または後続発話への注意喚起と共に *captatio benevolentiae* の態度が現れるということである。

従って、位置による機能がより優先的であり、その機能の上に語彙が何らかの情を付加すると言える。文頭では注意喚起の働きが強いため、情を表す呼びかけ語が現れにくい傾向がある。これに対して、話し手の伝達態度を効果的に表明できる文末では現れやすく、特に挨拶や返答、命令や質問といった行為に伴う場合には、話し手のユーモアによって様々な語彙が選択される。

このように、呼びかけ語の語彙によって、個人名を用いるよりも情報の伝達態度をより明確に、言語表現することができると結論付けられる。

3. まとめ

固有名詞だけでなく、名詞や形容詞を呼びかけ語として用いることにより、話し手と聞き手の人間関係を明示したり、擬似的な関係を作り出して話し手の発話態度を表すことができる。

呼びかけ語が、聞き手の注意を喚起する機能を果たす位置である文頭では、聞き手を特定できない可能性があるため、話し手の情を表すような語彙はあまり現れない。

これに対して、話し手の伝達態度を効果的に表すことができる文末では、様々

な語彙が用いられ、話し手の伝達態度をより効果的に表明し、他の位置では表すことができない言語外の情報を呼びかけ語の語彙に含むことができる。

文中では固有名詞の後に話し手と聞き手の社会的関係を示す語が用いられることが多い。

また、呼びかけ語が現れる位置による機能がより優位であり、その機能の上に語彙が何らかの情を付加する。だが同時に呼びかけ語の語彙によって情報の伝達態度をより効果的に言語表現することができることも明らかであると結論付けられる。

参考文献

- Beinhauer, Werner (1929; 1963) *El español coloquial*, Gredos, Madrid.
- Brown, Penelope & Levinson, Stephen C. (1978; 1987) *Politeness. Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Edeso Natalías, Verónica (2005) Usos discursivos del vocativo en español, *Español Actual* 84, Arco/Libros, Madrid, pp.123-142.
- Goffman, Erving (1967; 1982) *Interaction Ritual -Essays on Face-to-face Behavior*, Pantheon Books, New York.
- Hasbún Hasbún, Leyla (2003) ¿Qué le vendemos, reina? El uso de los vocativos en la feria del agricultor, *Revista de Filología, Lingüística y Literatura* 29 (1), Universidad de Costa Rica, San José, pp.201-212.
- Haverkate, Henk (1979) *Impositive Sentence in Spanish*, North-Holland Publishing Company, Amsterdam.
- Kerbrat-Orecchioni, Cathrine (2004) “¿Es universal la cortesía?”, Bravo, Diana y Antonio Briz (eds.), *Pragmática sociocultural estudios sobre el discurso de cortesía en español*, Ariel, Barcelona, pp.39-51.
- Nomura, Mei (2012) Las posiciones y funciones de los vocativos en español, 『神戸市外国語大学研究科論集』15, 神戸市外国語大学, pp.67- 90.
- Real Academia Española (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa-Calpe, Madrid.

資料

- Almodóvar, Pedro (2002) *Hable con ella*, Ocho y Medio, Madrid.
- (2006) *Volver*, Ocho y Medio, Madrid.
- Amenábar, Alejandro y Mateo Gil (2004) *Mar adentro*, Ocho y Medio, Madrid.
- Azcona, Rafael (1999) *La lengua de las mariposas*, Ocho y Medio, Madrid.

León de Aranoa, Fernando y Ignacio del Moral (2002) *Los lunes al sol*, Ocho y Medio, Madrid.

Lindo, Elvira y Miguel Albaladejo (2003) *Manolito Gafotas*, Ocho y Medio, Madrid.